



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「弁証法的方法」についての覚え書：拙著への平野厚生・柴田信也両氏の批評に対して
Author(s)	降旗，節雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 16(4), 1-23
Issue Date	1966-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31153
Type	departmental bulletin paper
File Information	16(4)_P1-23.pdf



「弁証法的方法」についての覚え書

——拙著への平野厚生・柴田信也両氏の批評に対して——

降 旗 節 雄

は じ め に

平野厚生・柴田信也両氏が拙著『資本論体系の研究』に対して詳細な批評を与えておられます。（研究年報『経済学』第28巻第1号所収）さきに検討した伊藤誠氏の批評と違って、これは、拙著ですでに批判ずみの立場から超越的な裁断を下すといったていものではなく、独自の観点から拙著における具体的な問題点を指摘されたものです。

結論的には、私は両氏の見解には同意しがたいのですが、両氏の主張の基礎をなす『資本論』に対する理解の仕方は、比較的一般的な、いわば正統派的なもの——その意味では、この見解をつきつめていけば、多少の違いはあっても前稿の第三の立場に通ずることになりはしないか、と考えられますが——であり、この批判に対して、さらに私の見解をのべることは、何ほどかの生産的な意味をもちうるのではないかと考えられますので、以下多少詳しくお答えしてゆきたいと思います。

なおこの批評では、拙著の篇章別にしたがって順次問題点が指摘されており、最後に総括的な批判が与えられておりますので、本稿でもその順序で考察してゆきます。

1

第1篇第1章「流通形態論の基本構造」について。両氏はまずこの章の内容を要約したうえで、次のような批判を下しておられます。

「ところで、著者は、岩田氏に対する批判にあたって、商品流通の拡大化

自体が経済過程の自立化をもたらすものではないと、流通形態と経済過程の自立化との間に断絶をみていた。しかしそれにもかかわらず、著者は旧来の生産関係の内部における生産力を前提するとはいえ、商品流通が経済過程の自立化をもたらすと基本的には考えている。しかしこの生産力は特定の生産関係と無縁の『流通形態』論とは相容れない。だから生産力を前提しても、それは『流通形態論』の展開とは理論的に合致しない。『流通形態論』の展開は、生産力の前提を事実上無視することにならざるをえない。したがって著者の見解は、結局岩田氏のそれと事実上同一のものとならざるをえない。生産力の前提といっても、その前提は『流通形態論』の展開においては無意味なるものとならざるをえない。だから岩田氏の見解から区別させるためには、著者は特定の生産関係と不可分の生産力という要因を、『流通形態論』の展開と齊合的に関連づける必要があろう。そうしなければ岩田氏の見解に対して反批判しても、事実上同一の主張にすぎないといわざるをえないのである。」

多少ごたごたしていますが、この文章で云おうとするのはこういうことでしょう。お前は原理論の商品・貨幣・資本というカテゴリーを、その実体を問題とせずに流通形態として明らかにすべきだという。しかも他方では原理論の展開は純粋な資本主義の内部機構の解明としておこなわれるという。だがたんなる流通形態だったら、純粋資本主義でなくても、商品経済がある程度発展しているところではどこでも把握できるのではないか。純粋資本主義でないと原理論は展開できないといっても、流通形態として商品・貨幣・資本の規定を把握するというかぎりでは、それは無意味ではないか。たんなる世界市場における商品経済の発展から、流通形態論の理論的展開をおこなおうという岩田氏の主張と、それなら実質的な違いがないことになりはしないか、というわけです。

「世界資本主義」論などという主張——というよりも妄想——と私の科学的規定とを一諸にされてはたまりませんから、どうしてもここで両氏の誤解をといっておく必要があります。しかしこれは実は、前稿でみた伊藤氏の批判

——「商品・貨幣・資本の形態論の展開のうちに、純粹の資本主義社会を前提とし対象とするということが、どのような積極的規定としてあらわれるかは、本書においても、かならずしもあきらかではない。」という批判——と内容的には同じ主張なのです。つまり純粹な流通形態論の展開は、かならず発達した資本主義を前提としなくてはならないといっても、流通形態そのものは特定の生産関係とは無縁に存在するのだから、『流通形態論』の展開は、生産力の前提を事実上無視することにならざるをえない」、つまり、資本主義社会でなくても商品流通が存在すれば、流通形態論は展開できるのではないか、ということです。宇野教授が『価値論』で提示された価値形態にかんする主張が、まだどれほど専門の研究者の間でも理解されていないか、あるいは誤解されているか、という格構の見本というべきでしょう。私は前稿では、この点にかんする伊藤氏の誤解は、氏が「旧社会関係とあらたな生産力との対立関係」が「商品経済自体の内的対立関係——価値と使用価値との対立関係——に転化」されるという、例の奇妙なドグマを信奉しておられるためであろうと考えて、宇野教授の冒頭の商品にかんする規定をしめすことによってお答えにかえたのですが、こう同じ誤解が続出するようでは、やはり一応立入った説明を与えておいた方が、不生産的な議論をさけるという点からも必要ではないかと思えてきました。そこで以下少し詳しくその点について述べます。

といってそう難解な問題ではない。エンゲルスがいったように商品経済そのものはきわめて古くからありますが、いずれにしても資本主義社会以外においては、基本的な生産関係に対する補足的な社会的物質代謝の媒介過程にすぎなかったという点では、同一の性格をもっています。もともと商品交換は、マルクスのいうように「諸共同体の終るところで、諸共同体が他者たる諸共同体または他者たる諸共同体の諸成員と接触する点ではじま」ったものだからであります。この商品交換がさらに拡大して「反応的に、内部的共同生活」にまで滲透していったとしても、商品経済はなおその「共同体」的の社会関係に対しては、補足的の外部の意味しかもちえないのです。したがって

資本主義社会以前の歴史過程は、基本的に商品経済自身の発展としてではなく、「共同体」的関係の発展として経過してきたのです。

ところが、資本主義社会においては、この社会関係の基軸である労働力が商品化されることによって、商品経済自体がこの社会関係を全面的に規制することになります。つまり資本主義社会とそれ以前の「共同体」的社会とにおいては、商品経済のこの社会関係に対してもつ意味がまったく異なるのです。といっても資本主義社会とそれ以前の社会においては、商品や貨幣の性格が異なるわけではない。たとえば商品が価値と使用価値との統一物であるという性格がかわるわけではないのです。ただ資本主義社会においては、それ以前の社会と異って、たんに生産物が交換関係において商品化するというのではなく、その生産過程自身が商品経済的関係をとおしておこなわれますから、その商品も、商品として完成した形態をとります。つまり資本主義社会以前の商品だったら、売れなかったら自家消費にあてる余地もまだ残されていた。ところが資本主義社会における商品は、もはやそういう余地のない商品——価値として実現されなかったら、使用価値としても絶対に実現されない商品としてあらわれます。これはその生産過程自体がまったく他人の労働によっておこなわれ、労働者はまったく他人の生産物を生産しているからです。これが商品経済の資本主義社会とそれ以前の社会とに対する基本的な関係の仕方であり、ここまではマルクス経済学においては一般的に承認されているとみてよいでしょう。(注)

(注) もっとも「社会的再生産が主として自立的な独立生産者によっておこなわれる」「社会的再生産過程の一段階」が歴史的に存在したと主張する論者もあるようですが、これは「商品生産は資本家的生産の基礎上ではじめて、生産の正常的・支配的な性格としてあらわれ」とするマルクスの基本的立場と背馳するものとして、マルクス経済学を前提として話をすすめているここでは考察の圏外におきます。

さてマルクスは『資本論』で、「資本家的生産様式、および、これに照応する生産関係ならびに交易関係」を研究していますが、この場合「理論においては、資本家的生産様式の諸法則は純粹に展開されるということが前提さ

れる」としています。そしてこの「理論」における「純粹」な「法則」の展開に対し、「現実においては、常にただ近似のみが存する」としても、「この近似は資本家的生産様式が発展すればするほど、そして、以前の経済的狀態の殘滓による資本家的生産様式の不純化と混合とが除去されればされるほど、ますます大きくなる」（『資』⑨236頁）というのです。つまりかれにあっては、「理論」の「純粹」なる展開は、歴史過程自身の「純粹」化によって、その客観性したがって科学性を保証されているというのです。そしてマルクスは、この資本主義経済の一般的解明を、商品にはじまって諸階級におわる体系的な理論構成によって遂行しました。すなわち商品・貨幣・貨幣の資本への転化という理論的展開を前提として、資本の生産過程をあきらかにし、さらに資本の流通過程の考察をもってこれを補足しつつ、最終的に資本家的生産の総過程論をもって総括するという構成です。

われわれのとりあげるべき問題はここからはじまります。この場合、資本の生産過程の解明にはいるまえに展開されている商品・貨幣・貨幣の資本への転化の理論的規定は、一体資本の生産過程以下の規定とどのような関連にあるものとして把握されるべきか。あるいは一般に、この商品・貨幣・貨幣の資本への転化というカテゴリーは、純粹な資本主義の理論的展開に対して、いかなる関係をもつかという問題です。

これに対するオーソドックスな解答は、ローゼンベルクの次の言葉が与えています。（ここでは第二篇「貨幣の資本への転化」にはふれていませんが、いまのところそれは直接関係ありません。）

「この編〔第一卷第一編——引用者〕では、われわれはまだ資本家も労働者も大土地所有者等々も知らない。このような抽象は、研究される現象——商品と貨幣——をもっとも純粹な形で研究し、たんに商品関係だけを表現する範疇としてそれらを考察する必要から、要請されたものである。だがこの『理論的モデル』は同時に歴史の反映でもある。單純商品生産は完成された経済制度としては存在したことがないが、しかし單純商品生産者はまったく実在的な人物であって、かつて存在したし、いまでも存在する。賃労働を利用

しない手工業者、小工業者、農民たちがそれに属する。」(青木書店版『資本論注解』①70～71頁)

このローゼンベルクの考え方は、わが国戦前の櫛田民蔵氏や河上肇氏の方法とほぼ同じものであり、戦後でもたとえば向坂逸郎氏によって代表される考え方と大体異なるところはないといってよいでしょう。

だがこのような考え方に対してはいくつかの疑問が発生します。

まず第一に、資本家的生産様式の純粋な理論的把握は、その歴史的純粋化によって保証されるというマルクスの方法に対して、このような考え方は背馳しはしないか。たとえ「単純商品生産者はまったく実在的な人物であつた」としたところで、「単純商品生産は完成された経済政度としては存在したことがない」とすれば、「単純商品生産」がそれ自身で自己に対する「不純化と混合」とを「除去」しつつあるという歴史過程は存在しないことになるのだから、この場合はマルクスの方法によれば、法則の純粋な理論的把握は不可能だということになりはしないか。^(注)

(注) これに対しては、さきにふれた「社会的再生産過程が主として自立的な独立生産者によって行なわれる」「社会的再生産過程の一段階」の「歴史的事実」という、例の主張があらわれるわけです。ただこの主張も、すでに拙著でふれたように、歴史的事実としてはまだとるに足りないものであつて、学問的には問題にする価値はないということと、もう一つ、かかる歴史把握をとるかぎり、いわゆる唯物史観の公式は根本的に修正ないしは否定されねばならないということだけを注意しておきましょう。階級社会と階級社会との間に存在した小生産者のユートピアとしての商品経済的無階級社会——これこそ、まさに自由・平等・博愛の歴史的物神化というべきでしょう。

第二に、ローゼンベルクの主張と結局同じことになりますが、単純商品生産社会の確立はないとしても、単純商品生産者が多かれ少なかれ実在するという点から、この問題により具体的に答えようとしたものに、エンゲルスの次のような主張があります。

「……中世の農民は、自分が交換によって得る物の製造に必要な労働時間をかなり正確に知っていた。村の鍛冶屋や車師は農家の鼻先きで働いてい

た。……農民も農民に売った人々も、みずから労働者であり、交換された財貨は各人の自己生産物であった。これらの生産物の製造に彼等は何を充用したか？ 労働であり、労働だけである。道具の填補のためにも、原料を作るためにも、その加工のためにも、彼等は自分自身の労働力以外には何も支出しなかった。だから彼等は、彼等のかかる生産物を他の労働しつつある生産者の生産物と、それらの生産物に費された労働時間に比例させて交換する以外に仕方がありえようか？ これらの生産物に費された労働時間が、交換されるべき大いさの量的規定のための唯一の適当な度量基準だったばかりではない。総じてそれ以外の基準はありえなかった。さもなければ、ひとは、農民や手工業者は一方の10時間労働の生産物を他方のただ1時間労働の生産物と交換してやるほど馬鹿だったと信ずるか？」（『資』⑧52～53頁）

われわれは、ここに価値法則についての誤解の典型的な一例をみることができます。単純商品生産者は商品交換において、商品に投下された労働時間を相互に知りあっていたから価値どおりに交換したというかかかる理解は、おなじみの価値法則は商品生産の法則であり、資本主義社会では剰余価値の法則あるいは生産価格の法則が支配するという考え方に必然的にみちびいていくことになります。だが歴史法則としての価値法則は、ひとが商品の価値量を正確に知って交換しあうために支配することになるのではない。逆です。商品経済においては、ひとはその商品に投下された労働時間がどれだけであるか、相手の商品についてはもとより自分の商品についてだって知りもしない。お互いになるべく安く買って、なるべく高く売ろうとするだけです。その競争の結果価格変動がおこり、利潤の変動がおこり、資本の社会的移動がおこり、需要に対して供給が調節され、結果として投下労働量による価値法則が貫徹することになる。

エンゲルスの小生産者が、いかに自己の商品が10時間の生産物であると頑張ってみたところで、もしもこの商品種類が、需要に比して著しく供給過剰である場合、価格を下げないわけにはいかないでしょう。その時はたして、この商品生産者たちの生産が縮小して、価格を価値にまでひきあげることが、

社会的な運動機構をとおして客観的に保証されているかどうか問題なのです。さまざまな「不純化と混合」を「除去」しつつ、機械制大工業として自立化した純粋な資本主義社会と異って、そのような運動は小商品生産者^二あっては、多方面の障害に出くわしてなかなか進行しないものです。それは、これらの小生産者の労働が、相当の年数の年期によって培われた技能によって遂行されるということを考えただけであきらかでしょう。そうだとすればエンゲルスの小生産者が、いかに「馬鹿」ではないとしても、価値どおりの交換は社会的機構によって保証されているとはなし難いであろう。つまり、その場合価値法則が、商品生産者の運動を規制する歴史法則として純粋に貫徹するとは認め難いであろう、ということです。むしろそうでないからこそ、商人資本による小商品生産者の収奪も可能となったのであり、したがって小生産者の分解も、プロレタリアートの創出も歴史的に必然的な過程として進行しえたのです。

さて第三に、かりに以上の諸点を問わないにしても、純粋な資本主義経済の運動法則を解明する一般理論において、何故ただちに資本の生産過程の解明にはいらずに、それに先だって「資本家も労働者も」存在しない、商品・貨幣というカテゴリーを扱わねばならないのか。いわゆる単純商品生産社会の発展ないし分解から資本主義が成立したからという歴史的理由によって、これを説明しようとするならば（歴史的事実としてはかかる把握は承認し難いのですが）、問題はさらに、その単純商品生産社会なるものはどのような歴史過程をとおしてもたらされたか、それが封建社会の解体によるとすれば、何故封建社会の分解が、さらにその前提としてその成立がとりあげられないのか、というふうに溯及されざるをえないでしょう。理論的展開がこのような意味での歴史的発展によって裏づけられねばならぬとするならば、歴史はつぎからつぎへと原因をもとめて、無限に過去へとたどられていくばかりでなく、そもそも歴史的発展と区別して理論的規定をとりあげること自体無意味になるほかない。まさか、資本主義の史的発生をたどればそうなるかもしれないが、それでは始末がつかないから、一応単純商品生産社会

でピリオドをうって、ここから始めることにしようといった便宜的理由によって、この単純商品生産がとりあげられたわけではないでしょう。

さてこのように、資本家社会に先行するいわゆる単純商品生産者の歴史的存在という点から、資本家の生産に先だって商品・貨幣の規定をとりあげる理由を説明することが困難であるとすれば、純粋な資本主義社会それ自体の構造からこれを説明する以外にありません。簡単にいうと、資本主義自体資本という流通形態がその内部に生産過程を包摂したものとして存在しており、この資本という流通形態は、さらに貨幣の、終局的には商品という流通形態の発展したものにはかならずからぬから、われわれは、資本の生産過程の解明にはいる前に、商品・貨幣というカテゴリーを流通形態として把握しなければならぬということになります。これはいうまでもなく、宇野教授がその『価値論』以来一貫して主張してこられた『資本論』の解釈の重要な論点の一つをなすものですが、この規定は誤解されて、単純商品生産論とは対極的な方向から、また別の歴史と論理の照応という主張をよびおこすことになりました。両氏が「商品流通から経済過程の自立化を説くとの主張」とされている、いわゆる「商品流通史観」です。もっとも両氏は、私をもこの主張の中に加えています。これは一寸困ります。私は、両氏のとりあげられた著書では、こういう考え方を批判するのに大分頁数を使っているのですが、どうも説明の不手際からか、残念ながらその点は了解していただけなかったようです。

ただ宇野教授の流通形態にかんする規定が「商品流通史観」を誘発したというのには、多少理由のないこともないのです。たとえば教授は、『経済原論・上』の「序論」でこうっておられます。

「資本主義社会は……商品形態をもって、その基本的社会関係たる資本家と労働者との関係を結ぶ社会である。そしてこれが又全社会を商品経済化することとなり、古代、中世と異って社会的に商品経済を確立するのである。しかし、商品は、したがって又貨幣は、さらになお部分的には資本さえも、古代・中世のように商品形態をもって基本的な社会関係を律しない社会にも出現する。このことは商品形態があらゆる物に、それが如何なる関係の下に

生産せられたかに関係なく付与せられ得るものであることを明らかにするのであって、形態的には資本主義的生産を前提とすることなくして説明し得られることを示すのである。」(同書、19頁)

「商品流通史観」の主張者は、商品形態は特定の生産関係と無関係に生産物に付与せられ、したがって形態的に「資本主義的生産を前提とすることなく説明し得られる」というのを、そそっかしくも、資本主義的生産様式を「前提とすることなく説明し得られる」とでも読み誤ったのでしょう。もう少し読み続ければよくわかりますが、教授は、流通形態論を「資本主義的に行なわれる生産過程」を解明する以前にときうる、そしてとかねばならぬ理由をのべておられるのであって、流通形態論を、資本主義社会以前の商品経済を対象として展開すべきだなどといっておられるわけではありません。教授はあくまで、商品・貨幣・資本の流通形態の規定を、発展した資本主義からの抽象的カテゴリーの理論的展開としてといておられるのですが、そうならざるをえない理由は後でもう一度ふれます。

ところで「商品流通史観」の主張では、こういう誤解がさらに教授の重商主義段階論に対する誤解によって、一層増幅されたと思われる節があります。周知のように、宇野教授は、発生期の資本主義を重商主義段階と規定し、商人資本をもってこの段階における支配的資本の存在様式としておられます。だがこのことは、中世封建社会の近世ブルジョア社会への転換の過程が、商人資本の独力によって遂行されたと主張しているわけではありません。この「全過程」の「基礎」をなす「農業生産者からの・農民からの土地収奪」は、封建的権力自身によって、あるいは封建的権力を多分にもった絶対王制としての国家権力によって遂行せられたのであって、資本家階級は、その形成過程においてかかる暴力的変革を、その「桿杆」として役だてたというのです。これはいわゆる単純商品生産者の両極分解をもって資本主義の発生期を説明するユートピア史観に対して、商人資本のもつ歴史的意義を正しく位置づけたものにほかなりませんが、「商品流通史観」は、この点を過度に強調して、商人資本自体の発展が資本家的生産様式をうみだす、つまり両氏の言葉をか

りれば「商品流通の拡大から経済過程の自立化を説く」にいたったわけです。そしてまた、この考え方をとる人達は、資本主義の末期段階である帝国主義段階からも、その基本内容をなす独占概念を排除し、これをたんなる株式会社形式の支配にかえることによって、資本主義の全発展過程を、商人資本の支配にはじまって株式資本の支配におわる自己完結的体系のうちに理解——というよりも誤解——することに成功しました。論理と歴史とのみごとな統一、その体系のあざやかな首尾一貫性は、たしかに充分評価にあたいるものといえましょう。ただしそれは歴史の観念論的理解の見本としてであって、歴史の科学的把握とは無関係なのですが。

さて、宇野教授の原理論も段階論も、このような「流通滲透視角」とは無関係だということは理解していただけたと思いますので、問題をもとに戻して、純粋化しつつある資本主義を対象としてそこから抽象しないかぎり、商品・貨幣・資本という流通形態のカテゴリーを理論的に把握することはできないという点について、考察をすすめましょう。

どんな社会においても、人間の自然との物質代謝の過程としての労働＝生産過程を基礎としないかぎり、その社会は成立しえません。資本主義社会もその例外ではありませんが、ただこの社会においては、この労働＝生産過程は資本の価値形成＝増殖過程となっています。ということは、生産過程が資本によって包摂されているということです。ということは、さらに、資本そのものと生産過程とは別のものだということを意味します。資本の生産過程の究明に先だって、資本をそれ自体としてあきらかにしなければならないのは、この理由によります。では生産過程から分離された資本とは何か。それこそ流通形態としての資本 $G-W-G'$ にほかなりません。マルクスが資本の一般的範式を $G-W-G'$ としたゆえんです。では $G-W-G'$ とは何か。それは自己増殖する価値の運動体であり、具体的には運動しつつ増殖する貨幣関係にほかなりません。では貨幣とは何か。商品の価値の自立化したものです。こうして私たちは最終的に、資本家社会の細胞としての商品に、しかも流通形態としての商品にたどりつくわけです。原理論の出発点はこうして与

えられます。マルクスが資本の生産過程の究明に先だって、まず商品・貨幣・貨幣の資本への転化をと扱ったのも、このような資本家的生産様式それ自身の構造によったものなのです。

このような考え方に対しては、おそらく次の二つの反論がだされうでしょう。

第一に、それなら何故マルクスは、商品形態を扱うばかりでなく、そのさい価値の実体をもとりあげたか。

第二に、商品・貨幣・資本を資本家的生産に先行して扱わねばならぬとしても、何故それを資本家社会に先行する商品経済を対象として、そこから抽象して問題にすることはできないのか。

第一の点については拙著で詳しくのべましたからくり返しませんが。要するに私は、それを、マルクスが古典派の方法からまだ完全に脱脚できなかったことに由来する、『資本論』の基本的構造にとって不必要な理論的異物とみるのです。価値実体の抽象にしろ、複雑労働の単純労働への還元にしろ、論証としてはとうてい成功しているとは思えません。むしろこのような価値実体を前提とすることは、価値形態や貨幣の資本への転化についての理論的把握を著しくさまたげるという結果しかうんでおりません。価値の実体にかんする問題はすべて、商品論においてではなく、資本の生産過程論においてとり扱われるべきだと考えるのです。

第二の点については、方法的に一寸やっかいな問題があるので、少し立入ってのべておきましょう。資本主義以前の商品経済を対象にした場合、商品・貨幣・資本というカテゴリーを純粹に流通形態として把握することは方法的に困難なのです。むしろ不可能といったほうがいい。この場合、これらの流通形態は、それとむすびついた自然的素材の性格と曖昧に混同されて把握されざるをえないのです。たとえば貨幣は生れながらにして金だという理解は、金は生れながらにして貨幣であるという認識によっておおわれ、資本は貨幣であるという命題と、資本は生産手段であるという命題とが、それぞれ対立的に自己を主張しあうことになります。もっとも資本主義社会を対象と

すれば直ちに純粋な流通形態の把握が可能かといえば、そうもいえません。たとえば古典派は資本主義を対象としながら、かえって形態規定を見失ってしまった。重商主義者が価値を貨幣に、そして貨幣を金において把握したのに対して、古典派は貨幣をたんなる流通手段に解消したということはよく知られていますが、この場合、前者はいわば形態規定を物神化してしまったのに対して、後者は形態規定を社会的再生産過程それ自身の中に解消してしまったわけです。つまり資本主義社会を対象としても、これを人間の本来の社会として、その歴史性を否定するならば、資本主義社会の形態規定は認識できなくなるのです。これを打開するためには、社会主義イデオロギーによるブルジョア・イデオロギーからの脱脚を必要としました。もっともこのことは、認識の客観性ないし科学性が社会主義イデオロギーによって直接保証されたというわけではありません。対象が自然と異なって、人間の行為自体をとおして形成される社会であるために、そのありのままの認識のためには、社会主義的イデオロギーを媒介としたブルジョア・イデオロギーの払拭、それによるたんなる階級的立場からはなれた人類的立場が要請されるというわけです。

そしてこの資本主義に対する客観的認識の中核をなすものは、労働力が商品化されていることの把握です。労働の生産物でもなく、したがって商品として生産されたわけでもない労働力が、くり返しくり返し商品化されることが、資本主義社会成立の根拠をなすのですが、この事実、ブルジョア・イデオロギーにとどまるかぎり絶対に認識しえない。社会主義イデオロギーに媒介された資本主義社会の自己批判をとおさないと、かかる認識は成立しえないのです。ただひとたびこの資本主義社会を対象とした、その客観的認識が確立すると、その理論的把握は、どうしても資本の生産過程から分離した、商品経済の流通形態としての純粋な把握を要請します。そして資本主義社会は、それ以前の商品経済と異って、このような流通形態の純粋な把握を可能ならしめる根拠を、それ自身においてもっている。絶対に商品として生産されたものではない労働力が商品化されざるをえないということがそれです。

資本主義社会では、労働力は商品として売れないかぎり、絶対に自己消費のきかない、つまり完全な他人のための使用価値として存在します。このような労働力によって、あらゆる商品は生産されざるをえないために、この社会ではあらゆる商品が完全に他人のための使用価値として、つまり完全な価値と使用価値との矛盾した契機の統一物として存在することになるのです。たんに生産物が流通過程で商品化されるというのではなく、その生産過程も商品の生産過程として、商品による商品の生産として規定されているために、この商品を純粹なる流通形態において把握することができることになる。これは常識的見解にとっては逆説的にみえるかもしれませんが、具体的にいうとこうです。この商品は商品によって生産され商品であるために、その生産過程も流通過程の一契機として完全に包摂されており、したがってまたこれを同質化して、流通形態のうちに把握することができる。これが実は生産過程を完全に捨象して商品経済を流通形態として把握するということの意味なのです。ところが資本主義社会以前の商品ですと、その生産過程までも商品による商品の生産過程としては規定されていないために、生産過程と流通過程とは異質な過程として対立しあうとともに、また多かれ少なかれ相互に部分的な影響をおよぼしあうことになります。だからここでは、生産過程の特殊事情によって、その生産物の商品化は制約されているとともに、生産過程もまた、流通過程の特殊事情によって影響をうけることになります。こういう商品を対象にしては、生産過程を完全に捨象して、それを流通形態として把握するということは不可能なのです。したがってまた流通形態として純粹に把握された商品を出発点におくと、その内部的矛盾の展開は必然的に貨幣・資本というカテゴリーをうみだすばかりでなく、資本主義的生産過程をその成立の根拠として論理的に要請することになるのです。

以上の説明を念頭においていただければ、『『流通形態論』の展開は、生産力の前提を事実上無視することにならざるをえない。』という両氏の私に対する批判が誤りであることは、容易に理解していただけたと思います。一定の「生産力」、つまり資本家の生産様式を前提としないでは、「流通形態論」は

展開されないのです。ただし逆に流通形態は資本主義的生産様式にしか存在しえないと考えたらこれは間違いです。商品も貨幣も、さらに資本さえも、資本主義社会以前から存在します。ただこういう商品や貨幣を対象にしては、その純粋な流通形態としての把握はなしえないというのです。かくて「特定の生産関係と不可分の生産力という要因を、『流通形態論』の展開と齊合的に関連づける必要がある。」という、両氏の私への要求はみたされたわけですね。

さらに両氏は「著者は、マルクスのこの形態と実体との二つを包む商品論の展開を、『混在』として処理していたのであるが、むしろその『混在』という処理こそ両検討を要する」として、「要するに『資本論』体系の冒頭が『商品』から展開されている点そのものに対してより立入った究明をなすことが、問題解決の正しい方向を見出すのに、まず求められなければならないと考え」ておられるのですが、この発言はどうもよくわかりません。私はまさに「『資本論』体系の冒頭が『商品』から展開されている点、そのものに対してより立入った究明をな」し、その結果、商品論で価値の形態と実体とを「混在」せしめてとくのは、『商品』から展開する方法と根本的に背馳するのではないかと考えたのです。「商品」ではなく、生産過程から、あるいは商品生産から展開されているのであれば、「形態と実体との二つを包む」方法も、あるいは許容されうるかもしれないのですが、そうではなく、まさに「商品」から始まっているという点をこそ考えていただきたい。この点について「より立入った究明をなす」ならば、両氏も結局私の主張のうちに「問題解決の正しい方向を見出す」ことができるのではないのでしょうか。

じっさい、この商品論で価値の実体をとかねばならぬと主張する論者に共通してみられるのは、『資本論』の出発点を「商品」というよりも、むしろ商品生産におかねばならぬとする考え方なのです。やや立入りすぎたかとも思いますが、流通形態にかんして以上のことを念頭において下されば、これからの問題は、そう詳しく論じないでもおわかりいただけると思います。次に移りましょう。

「貨幣の資本への転化」については、前稿でのべた理由によって、深く立入るのをさけたいと思います。ただし両氏の指摘される次の点については、比較的多くの方々から同様の質問をうけたので、ここで説明しておきます。こういうのです。

「商人資本形成〔式〕が価値関係の異なる諸『流通界』の媒介形式であるとされることは、明らかに資本制的生産以前の商品経済の発展過程を採り入れるもので、明らかに『純粹資本主義』の規定と矛盾することになっている。このことは、また、世界貨幣の媒介によって諸流通界が世界市場的に結合されるという展開にもみられる。これは方法の混乱といわねばならぬであらう。」

かかる主張は、しかし、原理論における抽象的方法の意味を理解しえぬものといわねばならぬでしょう。原理論は『純粹資本主義』としてあきらかにされねばならぬといっても、ただちにこれを全面的に扱うものではありません。まず資本の生産過程の解明にはいる前に、商品・貨幣・資本という流通形態をあきらかにしなければならない。この場合、たとえば商品は、純粹資本主義の商品でありながら、その生産過程からも、資本からも、さらに貨幣からさえも抽象されたものとして把握されなければならない。つまり原理論の最初の商品は、資本家的商品からの抽象物でありながら、まだ貨幣との関連をもたない、したがって価格のつかない商品としてあります。まだ貨幣とはいえない他の商品の使用価値で自己を価値をあらわすしかない商品、こういう商品を前にすると、両氏はおそらく、「資本制的生産以前の商品経済の発展過程」どころか、物々交換を「採り入れるもの」であると非難されるにちがいありません。たしかに一見物々交換の発展を扱うごとくでありながら、しかし理論的にはこれはあくまで資本家的商品の抽象的カテゴリーの展開としなくてはならないのです。貨幣なき商品、資本なき貨幣、生産過程なき資本——これらはすべて資本家的生産様式から抽象した流通形態の理論

的展開過程にあらわれるカテゴリーなのですが、両氏によれば、これらは「明らかに資本制的生産以前の商品経済の発展過程を採り入れるもので、明らかに『純粋資本主義』の想定と矛盾することになっている。」ということになります。

だがそれは誤りです。「純粋資本主義」を想定しても、そこから抽象したカテゴリーの展開をとおして、商品経済的機構を、生産過程の解明にはいる前にあきらかにしておかねばならないという点が重要なのです。したがって商品流通も、資本の媒介関係を捨象して、たんなる商品流通としてとりあげると、まだその価値関係を自己自身で規制することのできない制約された商品流通としてあらわれざるをえないのです。この制約は、世界貨幣を媒介として商品流通が対立しあい、さらに商人資本形式をとおして結びつけられることによって解消されてゆきます。「純粋資本主義」の商品流通を直接とれば、もちろんこんな過程がそのままあるはずはありません。それはすでに資本の生産過程によって全面的に媒介された、社会的再生産過程の一断面となっているからです。もちろんそういう意味でなら、「純粋資本主義」における商品をそのままとれば、貨幣と対立していない、つまり価格をもたない商品などありえないというのと同じです。だが理論的展開としては、私たちは、貨幣を捨象した商品から出発しなければならぬと同様、商品流通を、まだ資本流通によって媒介されない商品流通として考察しなければなりません。これは、資本主義以前の商品経済に素材をもとめることでは絶対にありません。たしかにこのような方法はカテゴリーの自己展開のかたちをとりますので、一見商品経済の歴史的発生過程をトレースするかのような外観をもたらしますが、むしろこれは論理的展開が歴史過程をも解明しうる基準を与えるものとして理解されるべきでしょう。『資本論』の展開が弁証法的方法をとるというのもこの点に根拠をもつのではないのでしょうか。『資本論』が「純粋資本主義」の内的構造をあきらかにするからといって、その論理の展開過程に資本主義以前の商品経済にしか具体的には見られないカテゴリーや運動形式（たとえば蓄蔵貨幣や資本の商人資本的形式）があらわれることを排除す

るものではありません。これをしも「方法の混乱」というのなら、『資本論』こそ「方法の混乱」でみちみちているとしなければならないでしょう。

そしてまた拙著では「商人資本間を媒介する仕方」で『金貨資本形式』を展開するが、価値関係のギャップを求めて活動する商人資本に、貨幣を貸しつけて利子のみで満足する資本を想定することはできないであろう。なぜならば、この資本もまた価値関係の隔差を求めて利子以上の利潤をなぜ追求しないのかは不明だからである。かくて『金貨資本形式』の成立の『必然性』の論証は成功していないと思われる。」と、両氏は批判しておられます。両氏は、ここで私が商人資本形式、金貨資本形式という資本形式をとりあげているのを、ただちに「商人資本」、「貨幣を貸しつけて利子のみで満足する資本」つまり金貨資本を扱っているかのように誤解しておられる。流通形態論が資本主義以前の商品経済を歴史的にとり扱うものでない以上、商人資本や金貨資本は問題にならないのです。ここではもっぱら商品流通に対し資本の商人資本的形式および金貨資本的形式がいかなる論理的関連にあるかが論じられるのです。商品流通と商品流通とをさらに媒介する商品経済的機構は、資本形式しかありあらず、資本形式はまず商人資本形式としてしかありえない。金貨資本形式は、この商人資本形式を前提として、同じく資本形式をとりながら、しかも商品の売買過程から直接的には分離することによって価値増殖する資本としてあらわれます。両氏はここで無条件に、利子は利潤よりも小さいと想定しておられますが、商人資本、金貨資本そのものではなく、その資本形式を考察するこの論理段階では、利潤や利子の絶対的の大きさは規定できず、したがってその量的比較も不可能なのです。産業資本の支配を前提として、商業資本や信用機構を扱う段階になるともちろんこのような資本形式論ですますことはできません。その場合は当然、利子で満足して、産業や商業に資本を投下しない資本家などありうるはずがない。この点を考えていただければ、拙著で金貨資本「成立」の「必然性」の「論証は成功していない」としても——もともと私はそんなことは意図しませんでした——、それが同時に、「金貨資本形式」の「必然性」の「論証」に「成功していない」こと

を意味するものではないことはおわかりいただけると思います。

さて「最後に、ここで最も重要な点は、『貨幣の資本への転化』は、はたして流通形態の転化の論証という方向で解決がつくのかという点である」として、両氏はこういっておられます。「たしかにその転化のためには、 $G-W-G'$ の成立が解かれなければならないが、しかしそのことは貨幣財産の所有者と自由な労働者の存在という条件を、所与の歴史的過程として、この転化論の論理外に追いやってしまってもよいということになるであろうか。……貨幣財産の所有者と自由な労働者とを歴史的過程として『転化』論の所与の前提にして、いわば論理外的に処理することは著者のいう弁証法的方法であっても、真の方法の中断とはならぬであろうか。」

しかし「貨幣の資本への転化」の論証において、「貨幣財産の所有者と自由な労働者の存在という条件を、所与の歴史的過程として、この転化論の論理外に追いやっている」のは、ひとり私のみではなく、マルクスもまたそうであるということはお忘れにならぬようにしていただきたい。すなわちマルクスはいう。「何故にこの自由労働者が流通部面で貨幣所有者に対応するかという問題は、労働市場を商品市場の特徴的一部門として見いだす貨幣所有者には興味がない。またそれは、暫くはやはり吾々にも興味がない。貨幣所有者が実践的にかじりつくのと同じように、吾々は理論的に事実にかじりつく。だが一つ明白なことがある。……この関係は自然史的關係ではなく、また同様に、すべての歴史時代に共通な社会的關係でもない。それは明かに、むしろ、先行せる歴史的発展の成果であり、幾多の経済的変革の——社会的生産の全一連の古い諸構造の滅亡の——産物である。」(『資』②318頁、傍点は原文どおり)

マルクスは「貨幣財産の所有者と自由な労働者の存在という条件」を、「先行せる歴史的発展の成果」として、のちに第1巻の最後第24章「いわゆる本源的蓄積」において具体的に——つまり「論理外的に」——とり扱っているのは周知のとおりです。私はこのマルクスの方法を正しいと考えます。したがって、この「貨幣の資本への転化」の論証の過程においては、私はマ

ルクスの方法に忠実にしたがって、あくまで「理論的に事実にかじりつく」だけで、両氏のいわゆる「歴史的過程」は「所与」のものとして、「転化論の論理外に追いやってしまった」たのです。この方法に両氏が異議をととなえられるなら、私ごときマルクスの亜流に不満を表明される前に、まず『資本論』そのものを対象として、その方法の「正当性」を問われてしかるべきだった。つまり具体的には、資本主義的生産の本源蓄積の過程を、「所与の歴史的過程」とすることなく、「転化論の論理」内においてとかれるべきであった、と考えるのです。かかる『資本論』の「弁証的方法」を根底からくつがえすであろうところの、両氏の「真の方法」なるものが、いかなる内容をもつか到底私ごときには想像することもできませんが、いまはできるだけ早くそれを教示していただいて、わが蒙を啓いていただくことを念願して次の問題に移ることにしましょう。

3

第2篇第1章「価値法則論」について。私は基本的には宇野教授の方法にしたがって、価値法則は、資本の生産過程において、労働力商品の価値規定を媒介として、はじめてその根拠をえて確立しようとする立場をとっております。ただ教授の『原論』に示めされているように、労働者が自己の生活資料を買い戻す関係を基礎としながらも、資本と資本との関係をとおして、この価値規定が生産手段を生産する資本に及んでゆくとする論証に疑義をもったのでした。むしろ労働者がその生活資料を買い戻す関係のうちには、資本と資本との、つまり生産手段を生産する資本と生活資料を生産する資本との関係も前提されているとすべきではないか、と考えたのです。この論証の当否は、読者による批判をまたねばなりません、両氏はそれ以前に、まず宇野教授の価値法則の論証自体に疑問を呈しておられるのです。

すなわち「この説明は成功的ではない。この説明は、単に、労働者は必要労働時間の生産物をうけとらねばならない。そして労賃はその必要労働時間に規定されているということをいっているにすぎない。生活資料商品が労働

時間に規制された労働力の価値と交換されるということは、まだ少しも生活資料商品の価値が労働時間によって規定されることを意味しない。」といわれるのです。はたしてそうでしょうか。これは実に奇妙な主張ではありますまいか。「労働者は必要労働時間の生産物をうけとらなければならない、そして労賃はその必要労働時間に規定される」ということを認めた場合、「生活資料商品の価値が労働時間によって規定されることを意味しない」ということが一体ありうるのでしょうか。いま労働力の生産に要する労働時間が6時間、つまり労働者1日の生活資料の生産に要する労働時間を6時間とし、1労働時間の生産物が0.5志としましょう。この場合労働者は、賃銀として3志えなければならないし、またかれはこの3志で6時間の労働生産物を資本家から買戻さねばならない。つまり資本家は6時間の労働生産物を3志で売らなければならない。それを4志ででも2志ででも売らねばならないのです。前者なら労働者は自己の労働力を再生産できず、後者なら労働者は、くり返し自己の労働力を売らねばならぬ必然性がなくなる。資本家社会がくり返しくり返し労働力の商品化をとおして再生産されねばならぬ——つまり資本主義の純粋な展開が想定されねばならぬ——とすると、資本家は絶対に6時間の労働生産物を3志で販売せざるをえないのです。もしも両氏のいわれるように「生活資料商品の価値が労働時間によって規定されることを意味しない」、いいかえれば、資本家は6時間の労働生産物を3志以上あるいは以下で売りうるとすると、そもそも「労働者は必要労働時間の生産物をうけとらなければならない」という関係自体が成立しなくなるのです。

私はさらに、生活資料が価値どおりに売買されねばならぬということは、そのことのうちにすでにこれを生産するに必要な生産手段も価値どおりに売買されねばならぬということをふくんでいると考えるのですが、いまこの点については立入らないでおきましょう。両氏の批判には、これまでの説明で十分な解答が与えられたことになると考えられるからです。「労働力の価値が必要労働時間に規制されるという関係が、一般商品の価値規定の中軸である」という論証に対する両氏の批判は、「かくて、失敗に終わっているといわ

ねばならない」でしょう。したがってこれにつけ加えて両氏の展開されている、宇野教授の価値法則把握に対する一般的批判と、両氏の積極的主張とについては、あまりふれる必要はないと考えます。

両氏は「『経済原則』が人間と自然との間の物質代謝関係一般を律する規定という意味では、必要労働時間による直接的生産者の再生産という関係は、資本と労働力商品との間の価値関係においても、その一般的基礎をなす関係でなければならないであろう。」とされながら、「しかしそれは直ちに労働力の価値の内容をなすとはいえない」といわれるのです。しかし「必要労働時間による直接的生産者〔の労働力……引用者〕の再生産」という「一般的基礎」において、他に何か「労働力の価値の内容をなす」ものがあるのでしょうか。両氏はまた「資本制の生産がその直接的生産者たる労働者を、必要労働時間を最低限として再生産しなければならないとしても、そのことは決して、直ちに、労働力の価値が、必要労働時間によって規定されなければならないことを意味しない」ともいっておられますが、この「必要労働時間を最低限として」という言葉から推測すると、両氏は、宇野教授の「経済原則」を基礎とした労働力の価値規定は、いわば労働者にとってその肉体的再生産の最低限を意味するものであって、資本主義社会では労働力の価値はさらに特殊歴史的な諸事情——文化的・慣習的等の諸要因——を考慮して決定されなければならない、というふうに考えておられるのかもしれませんが。そうであるとしたら、これもやはり両氏の誤解です。あらゆる社会において、労働力は、その再生産に必要な生活資料を消費しなければならないという時、この生活資料の中には、肉体的再生産に必要な最少限度という以上に、その社会で標準的に必要な、文化的・慣習的等の諸欲求を充足するための諸生産物も当然ふくまれているのです。「経済原則」は、もちろんあらゆる社会に共通な人間と自然との物質代謝という基礎的關係を規制する原則ですが、この場合、人間はたんなる動物としての存在を意味するのではなく、当然社会的人間でなければなりません。人間が労働をとおして自然に働きかけるという場合、歴史過程をとおして形成された一定の生産力を前提として働きかけるの

であって、そういう意味では労働＝生産過程も、たんなる自然的過程ではないのです。したがって「経済原則」でとり扱う労働力にあっても、その再生産に必要な生活資料中には、社会的要因によって規定された生産物がいらないをえないのです。ただ封建社会、資本主義社会等の社会の歴史的規定性の差異に応じて、この生活資料も、特殊歴史的内容において具体的に規定されることになるということです。

以上の説明で、「労働力商品に即した価値規定に対して」「きわめて疑問だといわ」れる両氏の主張も、完全に論破されたことになると思います。次に移りましょう。（未完）